

た浄土教でいう真の人間觀が鮮明にされてくるといえるのではないか。

曇鸞大師の五念門釈

顯 崎 願 正

善導による称名正行―正定業を中心とした五種正行の創設は、曇鸞の五念門釈にもとづくところ大なるものがある。今ここに、曇鸞の五念門釈が善導の五種正行へと移行し、純化する所以を考究してみようと思う。

善導大師の五種正行説は、その著『觀無量寿経疏』第四散善義のなかに、

言正行者專依往生經行行者是名正行。何者是也。一心專読誦此觀經阿弥陀經無量寿經等。一心專注思想觀察憶念彼国二報莊嚴。若礼即一心專礼彼仏。若口称即一心專称彼仏。若讀歎供養即一心專讀歎供養是名為正行。又就此正中復有二種。一者一心專念弥陀名

号行往坐臥不問時節久近念念不捨者是名正定之業。順彼仏願故。若依礼誦等即名為助業。

といつてゐる。この五種正行のものの特色を要約するならば次の三点をあげることが出来る。

先づ第一にこれら読誦、觀察、礼拝、称名、讀歎供養の五種正行はすべてこの土にあつて、阿弥陀仏の浄土に往生を願う者が実践する行である。第二に五種正行はいずれも阿弥陀仏及びその浄土にかかわりを持つという一点にしばられた行であり、阿弥陀仏等にかかわりをもたない行はすべて雑行としてしりぞけられていることが知られる。第三にはこれ五種の正行は五つの行が対等の關係において往生行となるのではなく、第四称名正行のみが往生行としての正定業であり、他の読誦以下の四つの正行は助業としてすべて称名正行に帰一するものであることが知られる。

このように善導の五種正行のもつ特色を三点にしばつて理解した私は、それらの三つの側点から曇鸞の五念門釈をながめることによつて、両者を比較しつつそこに純

化のあとをさぐつてみたいと思う。

先づ第一の観点である「浄土に往生を願う者がこの土において往生行を行ずる」ということについて五念門釈をみてみようと思う。礼拝、讃歎、作願、觀察、回向の五念門はすべてこの土において行ずる行であるばかりでなく、特に第五回向門釈の如きに至つては「還相者生彼土已得奢摩他毗婆舍那方便力成就廻入生死種林教化一切衆生共向仏道」^②と言うように、彼の土からこの土へ還來する行をも併せ説いていることが知られる。『往生論』自身の五念門に入出の別を指摘し、^③第五回向門をもつて出と規定している。曇鸞はただ出としての回向門を往還の二相に分つたのである。言葉は相異するが「入」というのは「往相」であり、「出」というのは「還相」である。さらに五種正行はただ単に往生浄土行として説かれているのに対して、五念門釈は五念門を往生浄土行として説きながら、しかもそれを実践したものが獲得するところの得益について説くところがある。即ち第二讃歎門釈における名号が無明の黒闇を破すると言うことや第三作願門釈における止の三義や第四觀察門

釈における觀の二義の如きはそれのことを雄辯に物語っている。(なお、近門、大会衆門、宅門、屋門、園林遊戲地門の五門を解説して五念門の一一の得益をあげている。つまり五念門釈は往生浄土行と共にその得益をも併せ説くものであることが知られるであらう。

次に第二の観点である「阿弥陀仏にかかわりのある行であるか否か」ということについて五念門釈をみてみようと思う。第一の観点において指摘したように還相回向は生死に流転する衆生にかかわる行である(勿論その還相回向がこの土において衆生とともに仏道に向うということが、阿弥陀仏の願力を増上縁としてなされると規定するならば、究極的には阿弥陀仏にかかわりのある行であると言い得よう)であるから、この還相回向を除いたすべては阿弥陀仏にかかわる行であると言い得るわけである。

算後に第三の観点である「五つの往生浄土は對等の關係においてあるか否か」ということについて五念門釈をみてみようと思う。五念門釈においては五種正行にみられるような助正の區別をしていない。この点五つの行は

対等のようであるが、『往生論』自身が示すように五念門は次第順序をもつて次第順序をもたない、否そうしたことを問題視しない五種正行と相異するところがある。

以上概略、五念門と五種正行について三つの観点から相異のあることを指摘したのである。これによると五種正行は五念門がもつ往生浄土行とその得益という二つの面を切りはなして、得益を同時に示さないで、もつぱら往生浄土行のみを示すものとして純化されたことは事実である。又第一の観点によると五念門も五種正行も、先に指摘した点をのぞけばすべて阿弥陀仏にかかわる行であることには変りがない。然し阿弥陀仏に関する學と善導との見解に相違のあることを見逃してはならない。即ち疊は阿弥陀仏を実相身為物身というようならへ方をしてゐるのに反し善導は本願成就身（酬因感果身一報身）としてとらえているように、疎密の相違のあることを忘れてはならない。しかし兩者とも阿弥陀仏の本願力（疊は第十八、第十一、第二十二の三願を、善導は第十八願のみを強く主張してゐることは事実である。しかし第三の観点に至ると阿弥陀仏の本願力の強調の仕方

に疎密の差が明確にあらわれてくる。疊は『往生論』の五念門に註釈を加えたのであり、善導はそれにもとづきながらも脱皮して新しい実践体系を樹立した点で一概には論じ得ないことは当然のことである。五種正行が称名の一行にしばられるということはそれが本願行であり本願の聖意にかなう行であるからである。かく本願行としての称名正行を正定業とし、他の四正行を非本願行ではあるが称名の助業というように区別をしているが、この中本願行としての称名正行は第二讃歎門釈を中心とした、疊の名号釋と本願釋とに負うところが大きい。

註

- ① 淨全二 五八頁下
- ② 淨全一 二四〇頁上
- ③ 淨全一 一九七頁―一九八頁
- ④ 淨全一 二三九頁下―二四〇頁上

道綽禪師の聖淨二門判